

P14

口腔衛生に関する指導効果の判定

第2報：患児の歯科知識の比較

○若松 美咲, 高 裕子, 入木田 美雪, 西田 茉央

松元 一生, 宮川尚之

((医)まほうつ会 みやかかわ小児矯正歯科)

【目的】

日常臨床で口腔衛生に関する指導を行っているが,指導内容がどの程度患児に定着しているのかを検証する機会は少ない。本研究では長期的に指導を受ける事で歯科知識が増加し定着するかについて,当院に5年以上通っている患児と通院2年未満の患児について,歯科知識の検定テストを実施し,その結果を比較検討することが目的である。

【対象と方法】

対象は当院に定期的に通院する患児のうち,5年以上欠かさず通院している(平均6.0年)(以下A群)患児41名と通院2年未満(平均1.25年)(以下B群)の患児31名である。

方法は当院で開発した歯科知識検定テスト患児用に回答させた。各群で平均正答率,正答率の分布,設問ごとの正答率について比較した。

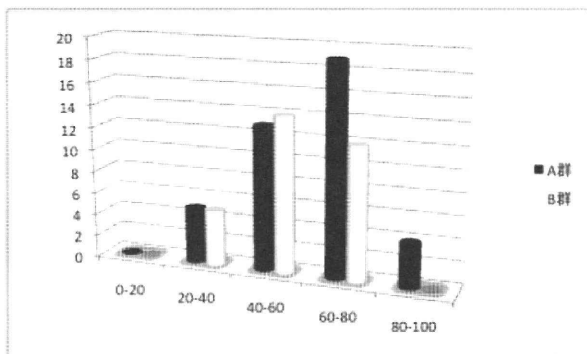
【結果】

1) 平均正答率

A群は64.0%,B群の平均正答率は56.8%であった。

2) 正答率の分布

正答率の分布を以下に示す。



3) 設問ごとの正答率

図1に両群設問ごとの正答率を示す。

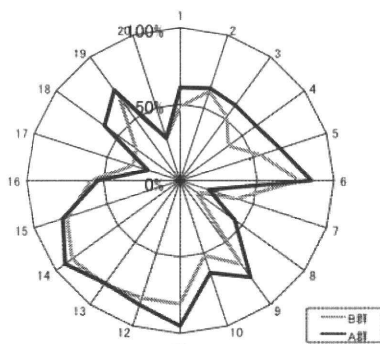


図1 両群設問ごとの正答率

【考察】

今回の研究では両群の歯科知識に対する差異は小さかった。また設問ごとの正答率の傾向も類似していた。正答率の高い設問は,フッ化物の使用,歯磨剤,歯肉炎の項目であり,上顎臼歯の頬側の磨き方,補助用具について,プラークの定義,よく噛んで食べる意味については正答率が低かった。これは齲蝕と歯肉炎については,歯科医院以外でも学校などで指導を受けたり,知識を得たりする機会がある事や,定期健診時の指導内容に必ず齲蝕と歯肉炎についての毎回指導するために,両群とも高い正答率となり,その他の項目については,指導する衛生士個人にまかされているため,指導を受けた子とそうでない子がいるためと考えられる。

口腔衛生に関する指導が直接的に患児の歯科知識に反映しているとは言えない結果となった。設問によっては正答率に差が認められたものがあり,むし歯になりやすいアイスクリーム,補助的清掃用具,外傷時の行動については,A群の正答率が高かった。これらの項目は定期健診での指導時に教育される項目であり,一般的に知られている項目について,指導の効果が反映されたものと思われる。

意外にも臼歯部の磨き方や補助用具については日頃指導していると思っていたが,患児に伝わっていないことがわかった。

今後はどのようにその他の歯科知識を1回1回の受診時に指導していくかが課題である。

【文献】

- 1) 五十嵐清治/吉田昊哲 編:「世代をつなぐ小児歯科」クインテッセンス,東京 2009